

生態系

今回の大阪府レッドリストでは、野生動植物種の選定や地形地質の選定と合わせて、大阪府内の貴重な生態系を有する地域を選定した。生態系名の区分は、基本的に地形区分と植生区分を併用した。

ランク	生態系名	環境区分	定義	状況
Aランク				
	低湿地(規模の大きいヨシ原など)	河川	標高10m以下で、5ha以上の規模の河川敷の草地。常に湛水しているか洪水時に湛水する	かつて淀川下流部の広い地域は繰り返される洪水などの攪乱で低湿地環境が維持され、ノウルシやトネハナヤスリなど湿地や氾濫原を好む生物が多く生息していた。現在の大阪では、規模の大きな低湿地は淀川河川敷にしか残されていない。部分的にはヨシ焼きなどの攪乱の代替となる管理もなされ氾濫原に特有な多様性の高い草地となっており、草地生の鳥類や昆虫など動物の生息地としても重要である。かつては淀川各地に低湿地が存在したが、その多くは失われ、鶴殿など限られた場所しか残されていない。鶴殿のヨシ原は保全対象にはなっているが、道路建設や攪乱の減少などによって状況は悪化している。
	ワンド群	河川	5つ以上のワンドを含む地域のワンド内および周囲の草地・林	ワンドは淀川に独特の明治時代の治水工事によってつくられた人工環境で、河川本流に接してたまり状の止水が存在する。ワンドは、河川増水時には適度な攪乱を受け、イタセンバラやアユモドキなどたまりや分流を住み場所とする生物にとって貴重な代替環境として機能してきた。かつては、枚方～河口に多数存在したが、次々と埋め立てられ、現在まとまった形で残っているのは城北と庭窪の2地域だけある。まとまりを失ったことで、住み場所の多様性を減じ、更に堰の影響による水位変動の減少、外来生物の増大などにより、たまりの生物は生存が困難になっている。
	アマモ場	海岸・河口	アマモやコアママが生える浅い海域	前浜干潟の沖の浅瀬に形成され、海洋生物の産卵場所、稚魚や底生生物の生息場所、採食場所として重要である。かつては大阪湾に広く存在し、泉南地域では近過去まで珍しくなかった。しかし海岸部の埋め立て、護岸の進行にともない、大部分のアマモ場は急速に失われ、現在はわずかに点在するにすぎない。再生の試みも行われているが、依然として危機的な状況にある。
Bランク				
	ブナ林	林	ブナの自生地	大阪府のブナ林は、下層構成種の豊かな太平洋型の群落を形成しており、府下では貴重な冷温帯の生態系となっている。いずれもまとまった群落は社寺林として限られた面積にのみ残ってきたが、周辺部の草地や雑木林にも冷温帯の生物が分布していた。戦後拡大造林によりこれら周辺部を失い、さらに、近年は妙見山においてはシカ食害により下層植生の衰退が激しい。金剛山と和泉葛城山においても後継林冠木が十分成立していない。ブナの植樹などの活動が行われているが、地域系統の維持、遺伝的多様性、群落の齢構成など配慮すべき要素が多い。
	中間温帯林(モミ・ツガ林など)	林	モミ・ツガ・アカガシ・イヌブナおよびイヌシデなどから構成される林分	モミ・ツガ・アカガシなどの林は、ブナが極相とまらない積雪の少ない冬の乾燥の強い冷温帯下部における自然度の高い林分である。北摂には剣尾山・本山寺などにモミやアカガシの林分がみられるが、いずれもシカ食害による下層植生の破壊、ナラ枯れによるアカガシやミズナラ、コナラの枯死など重大な危機にある。
	大規模な照葉樹林(シイ・カシ林)	林	コジイ・ウラジロガシなどを主体とした10haを超える規模を持った照葉樹林	かつて縄文晩期の大阪府は広く照葉樹林が覆っていたと考えられるが、人間活動に伴いアカマツ林がひろがると、地域的な時間差はありながら衰退を続けた。府下においては都市近傍や丘陵には殆ど残らず、山手の社寺林としてのみ広い面積の照葉樹林が残ってきた。2011年に島本町で、ナラ枯れ病の侵入が確認された。ナラ類だけでなく、コジイやアラカシなども被害を受け、箕面公園域、島本町若山神社いずれもナラ枯れの影響が出始めている。またシカ食害の影響も見られ、希少種の動向が懸念される。
	大規模なアカマツ林	林	10ha以上の規模のアカマツ林(人工地盤の上を形成されたものを除く)	かつてアカマツは建材として有用であるため、手をかけて維持され、さらに柴やマツ葉の利用も盛んであったことから、腐食を欠き鉱質土壌がむき出しになったアカマツの疎林が多くひろがっていた。これらの環境は、林縁の植物や昆虫にとっての生息場所であった他、マツタケなどアカマツの共生菌もよく採取されていた。1960年代以降のマツノザイセンチュウによるマツ枯れの進展、柴・マツ葉が利用されなくなるに伴い、大規模なアカマツ林が少なくなっている。
	若齢幹を有するナラ林	林	1ha以上の、20年以内に林冠木を萌芽更新させた履歴を持つコナラ・クヌギ・ナラガシワなどの林分	定期的な伐採により萌芽した若齢のナラの枝はミドリジミ類をはじめさまざまな昆虫が利用する。また、林冠が閉鎖していないために林床には林縁生・草地生の植物が多くみられた。腐食の少ない林床には、アカマツ林同様、ショウゲンジ、バカマツタケなどの特有な菌類が発生していた。しかし、薪炭利用がなくなり、若齢の枝を持ち林床を整えたコナラ林は、能勢町・豊能町の一部にのみに残る存在となっている。
	貧栄養湿地	湿地・草地	山間部の谷あいや丘陵に成立し、小規模な湧水で涵養される湿地	粘土層を有する丘陵や花崗岩地などでみられる湧水で涵養される貧栄養湿地には、ミカキグサ類・イシモチソウ・モウセンゴケ類などの食虫植物、トキソウ、サギソウなどが生育し、規模が小さいながらも特異な生態系を形成する。開発等による生息地の破壊や遷移の進行、盗掘などが生態系の存続を脅かし、また分断・孤立化という問題も生じている。
	カヤ場	湿地・草地	ススキの収穫用に定期的に草刈りや火入れが行われて、維持されてきた草地	人が定期的に草刈りや火入れを行って維持してきた草地。もともと痩せた立地で森林が発達しにくい環境でもある。かつては、収穫したススキが、屋根葺きの材料や家畜の飼料、肥料として利用されていたが、今日では担い手が減少し、手入れも行き届かなくなっている。草原環境の変質は、キクアザミやヒメユリなど草原生植物の絶滅にもつながりかねない。

ランク	生態系名	環境区分	定義	状況
Bランク(つづき)				
堤体草地(大規模改変を受けていない)	湿地・草地		過去50年の間に大規模改変を受けず、刈り取りによって維持されてきた河川堤体の草地	大規模河川の堤には、定期的な刈り取りによる里草が維持されてきた。ツルボやカンサイタンポポなど短茎草本が繁茂し、場所によってはヒキノカサやアマナなど湿性草地も形成され、草地生の昆虫の生息地でもあった。近年、堤防の改修により乾燥化が進むと共に、外来種の吹付け緑化などにより、かつてのような環境は次々と失われている。
低地のまとまった水田群	農耕地周辺		標高100m以下の地域における50ha以上のまとまった水田群	大阪府の低地はかつて水田が卓越していたが、道路建設や宅地開発などによってその大部分はすでに失われた。減少傾向は現在も続いており、残された水田も分断化され、ヒバリやケリ、タマシギなどまとまった水田が必要な鳥類に適した場所が急激に減少している。また圃場整備によって水生生物が水路と田んぼを移動できなくなり、乾田化で水田・水路に水が存在する期間が短くなるなど、質的にも多くの生物の生存に適さなくなってきた。
干潟・河川汽水域	海岸・河口		遠浅の海岸で、干潮時に1ha以上砂底泥が出現する環境、及び周辺の汽水域。人工干潟を含む	干潟は河川からの有機物や栄養塩類をせき止める機能を持つとともに、特有の底生生物やシギ・チドリ類が生息する環境でもある。明治以降、特に1960年代からの沿岸部の埋め立てや河川改修等により、大阪府域では干潟面積が著しく減少し、広く大阪湾全域に影響をもたらしている。干潟の生物の保全には、現在かろうじて残されている干潟を残すことが求められる。近年、人工干潟造成の取り組みがあるが、造成・維持管理方法の検討とともに、生物相の継続的なモニタリングが求められる。
砂浜	海岸・河口		500m以上にわたって連続する砂底質の海岸線	砂底質を好む海浜植物や底生生物に生息場所を提供する。波が砕ける汀線(砕波帯)は、沿岸性魚類の稚仔魚の生息場所としても重要。かつて大阪湾岸に広く存在したが、1960年代以降の沿岸部の埋め立て、及び砂の供給源である河川上流部でのダム建設等により、砂浜の大半は失われた。人工砂浜造成が取り組まれているが、造成・維持管理方法の検討とともに、生物相の継続的なモニタリングが求められる。
Cランク				
低地照葉樹林(シカシ林)	林		1haを超える規模の、標高200m以下のシカシ林	大阪府には大きな社寺が少なく、都市の薪炭利用圧が高かったこともあり、低地の照葉樹林は社寺林として小規模に残るのみである。小規模であるため攪乱によって乾燥化する危険性が高い。今後、ナラ枯れの進展に伴う変化や周辺社寺などの土地利用形態の変化、周囲の開発の影響なども懸念される。北摂ではシカ被害の影響も出ている。
貧栄養なアカマツ疎林	林		1haを超える規模のアカマツ疎林	花崗岩地帯などの尾根部には、アカマツ、ウラジロノキ、リュウブ、ソゴなどが茂る疎林がみられ、貧栄養環境を生息地とする菌類や、明るい林や林縁の植物や昆虫の重要な生息場所であった。また、貧栄養湿地・ため池・棚田の後背林としても重要であった。しかし、山間での人間活動が低下しているのにもない、若いアカマツが育つ明るい林は極端に少なくなっている。
棚田(畦畔を含む)	農耕地周辺		5ha以上の棚田及びその周辺のため池や二次林を含めた里山環境の広がり	棚田だけでなく、周辺の林や小さなため池とセットとなった里山環境は、多様な生物の生息地となっている。しかし近年、圃場整備で良好な環境が改変され、道路建設などで大規模に失われ続けている。近年は、北摂ではシカ、泉南ではイノシシの増加の影響が懸念される。
低地のため池群	農耕地周辺		標高100m以下の地域におけるため池群。500m以上あげずに20以上のため池が存在する地域のため池と周辺農耕地	大阪府は日本でも有数のため池の多い地域で、低地では周辺の水田や水路とともに多様な水辺の生物を育んできた。しかし水田の減少に伴い水利の需要が減るとともに、宅地開発などによって現在も次々と埋め立てられ減少し続けている。残されたため池も護岸され、多様な生物の生息に適さないものに造り替えられていることが多い。
河川源流部	河川		源流地点が400m以上の河川における、標高200m以上の源流域の溪流及び周辺の林。ただし源流域周辺が耕作地になっている場合を除く	ある程度以上高い山を水源とする河川源流部の細流にはミヤマウズムシや流水生サンショウウオが生息し、少し下った溪流にはカジカガエルやカワガラスなど流水を好む生物が生息する。周辺の林を含め山地の河川源流部や溪流は比較的保全されているが、ダム建設による水没、また道路建設・トンネル工事にともなって地下水脈が切られると流れが消滅する恐れがある。
河川敷の砂礫地	河川		1ha以上の河川敷の安定した砂礫地	大阪府では、河川敷のまとまった砂礫地は、淀川と大和川・石川に点在する他は、極めて稀である。砂礫地を好む鳥類や昆虫などにとっては貴重な生息地となっている。砂礫地は、河川整備によってしばしば取り除かれるほか、治水により上流からの土砂供給が減っているために減少傾向にある。近年は人の立ち入りの影響も強く受けている。
岩礫性海岸	海岸・河口		岩や石で汀線が自然に形成された海岸線	大阪府の岩礫性海岸はもともと岬町に限られている。後背には、ウバメガシを主体とする海岸林が形成される。岩礫潮間帯は多様な底生動物や藻類が生息し、非常に高い生物多様性を有する。大半の地域は保全対象とされている。食用の貝類やウニ類、ワカメなどの採捕が行われており、過剰な採取は、生態系の破壊につながりかねない。
洞穴	その他		人が掘った坑道跡等を含む洞穴	北摂を中心に鉱山跡などの洞穴が点在しており、そこは洞穴生の動物群の生息地であり、他では見られない特殊な生態系を構成している。大阪府の洞穴は、ほぼすべて人工的なもので、時間と共に崩落が進んでいるため、将来的にはその多くが失われかねない。
代替裸地・草地(埋立地)	その他		埋立地に成立した10ha以上の裸地・草地・湿地	農耕地、河川敷の砂礫地・草地、砂浜、干潟などが減少続けている大阪府では、埋立地の裸地や草地、水たまりが、鳥類など移動力の高い生物群にとって、その代替環境として機能してきた。とくに次々と海岸が埋め立てられた1970年代以降、その重要性が高くなり、ツバメチドリやチュウヒなど埋立地でのみ繁殖が確認されている鳥類もいる。時間とともに、埋立地は整備され、新たな埋立地も供給されなくなってきた現在、代替環境としての機能が失われる恐れがある。